

小野小町 259P 上 4行と5行の間に挿入する。  
標本番号 62  
地番 903 (二八) 5.577P

・カラ一

・貞の上半分に、

大きくはめ出せり

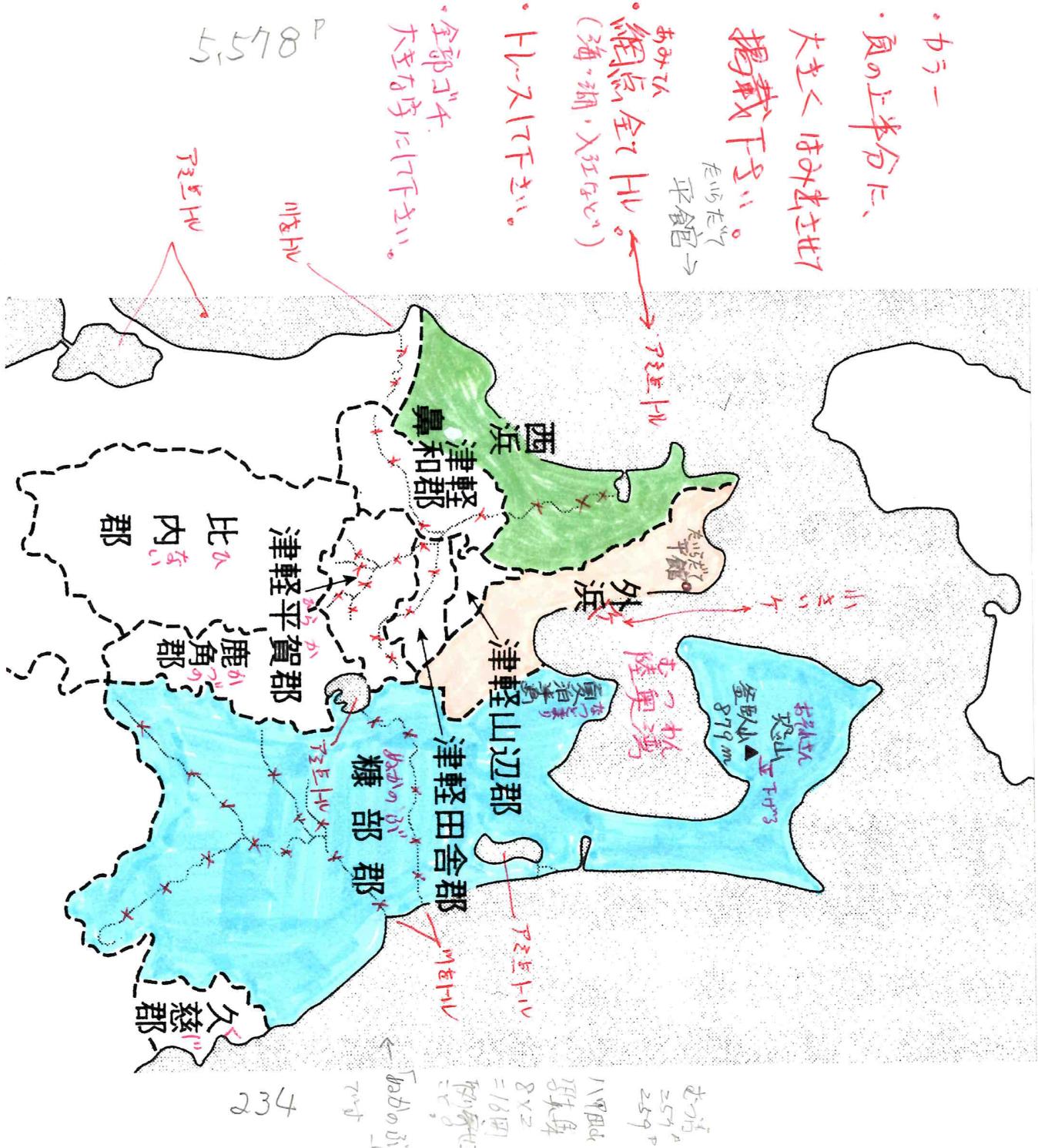
掲載下さい。

●網点全ヘル  
(海・湖・入江など)

●トレスにて下さい。

・全部ゴチ  
大きちにて下さい。

578  
55



140G

第551図

外浜を中心とする郡郷制図

130G

△青森県の歴史山長谷川成一

△山川出版社 2000年2月25日発行 80頁参照



全て10QG→  
で入力下さい。

善知鳥崎

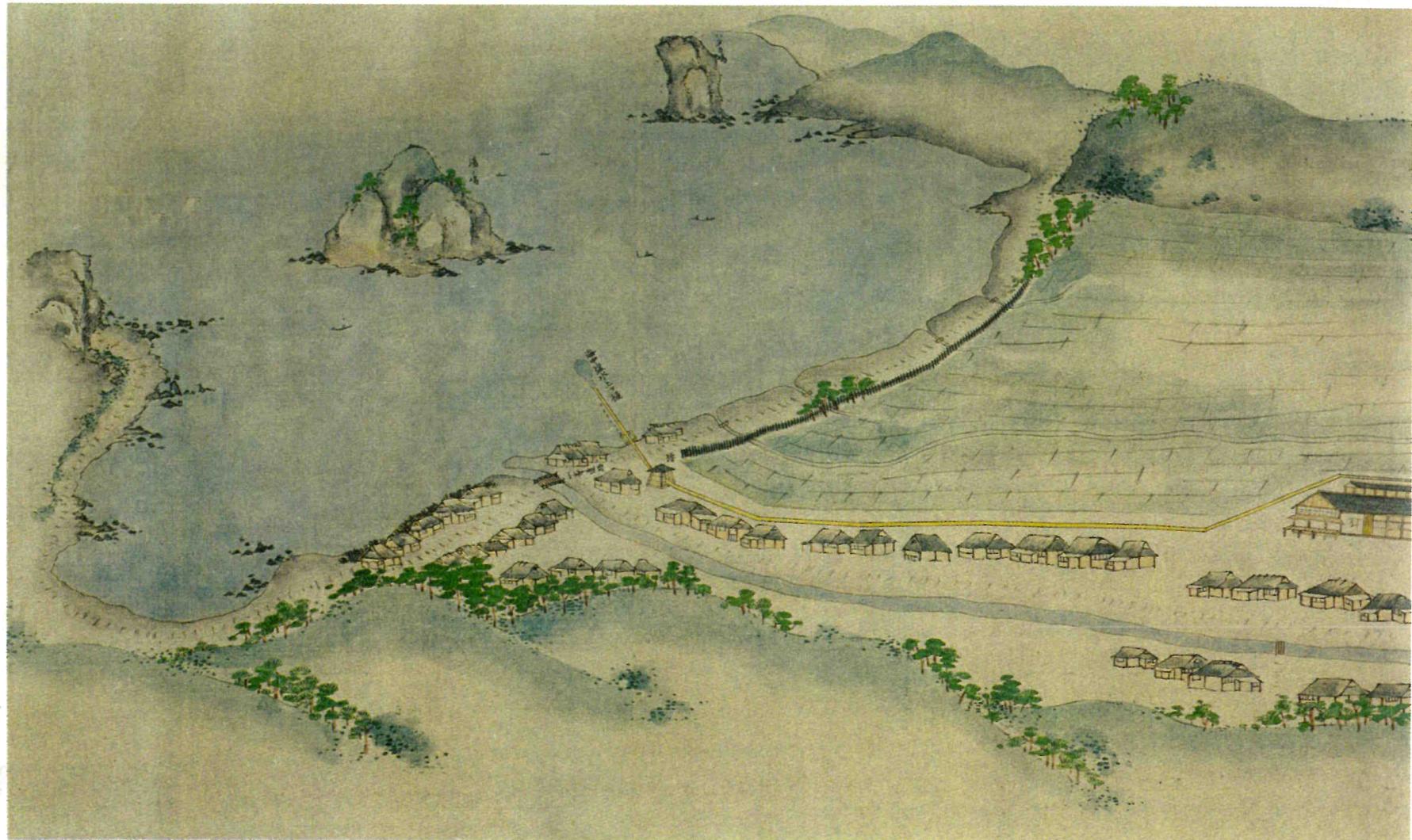
湯ノ島 5,580' ハダカ山島

夏泊半島

・カラー  
・左頃の上半分に  
大きくはみ出でて  
掲載下さい。

・出来ただけ、  
明るく、  
鮮明に  
お願ひます。

・著作権許諾  
は、不要だと  
思いますが、  
企のために尋ね  
下さい。



10QG→  
上げる木  
浅虫製塩場 (海中塩水汲み上げ装置)

右づめ  
かどり

中へぶりかけ  
10QG [温泉熱を利用して全国でも珍しい製塩場。明治42年(1909)9月、政府の塩専売方針により廃止されるまで稼働]

13QG 中へぶりかけ  
14QG

第553図 浅虫近傍に点在する大小の島々

『新青森市史』資料編6、近代(1)、青森市、平成16年3月発行、口絵26参照

254

もく水のみに染み渡る。  
余どは善知鳥才と見えり。も冥り。  
波瀬太郎ヨリは善知鳥才と見えり。も冥り。  
金錯金の此角を鳴らし、羽を搏き、  
立てては、化鳥となり、罪人を追つ立て  
とある。善知鳥レ鏡世流大成版、鏡世左  
近、檜書店、平成十五年九月二十五日発行下

大飛君(左み)の末に  
「君は舟、臣は水」とある。 (2)

5,582<sup>P</sup>

小林 292<sup>8</sup> 子

卷之二

前文 7~8行

・また、管子らの春秋時代、齊の管仲著とい  
われる「管子」に、「君は舟、臣は水」とい  
うとある。この「君は舟、臣は水」の由来は、  
春秋時代、齊の管仲が、舟を用いて水を渡る  
時に、舟の上に立つ君の姿が、水の上に立つ  
臣の姿に似たことから、この言葉が生まれた  
とされる。この「君は舟、臣は水」の言葉は、  
その後、多くの文書や書籍で引用され、古く  
から知られる言葉として残っている。

参考までに述べると、子の字は

① 男子の敬称である。

② 人をよぶ敬称である。

③ 男子の自称である。

とある。〔漢和辞典 小林信明〕

父と君に  
子を臣に  
たとえている  
のだろう

(1) 主君の自分が仕える君(おきみ)を親(おやぢ)とおひたは  
(2) 臣(おみこし)に仕える者(もの)を子(こ)とおひたは

明白(めいはく)でないもののが、  
想像(おもひ)たく

まくべ(まくべ)次のように考(かう)えてみた。

(1) 親王(おやぢう)へ光孝天皇(こうこうてんのう)の皇子(み皇子)が、  
トオシ(トオシ)と呼(よ)ばれて、  
的(てき)な地位(ちぢ)の者(もの)へ実は父(おやぢ)・大江惟(おおえ)章(あきら)が、  
子(こ)とお父(おやぢ)とおう

安(やす)方(かた)と言(い)つた。

(2) ところが、ある時(とき)、陸奥(りくあ)國(くに)外(ほか)ヶ(が)境(きみ)の猪(いのし)師(し)が、  
親王(おやぢう)の律令制(りつりんせい)で、天皇(てんのう)の兄弟(いとだい)・皇子(み皇子)を

\* 何(なん)うかの(かの)いざ(いざ)が、あ(あ)つて殺害(さがい)に至(いた)た。  
を殺(をさ)すかた

(3) 王(のう)の命(みのり)を奪(うば)つたのかは、分(わ)からない。  
かかわらず、善(よし)知(じ)鳥(とり)の

作者(さきしゃ)は、そ(そ)うした事情(じゆう)のととなつた演劇(えんげき)の倉(くら)

に、かかわらず、史(し)史(し)を臍(おほら)ぎとすため、あ

へ親(おやぢ)かうとうと、ウトオと呼(よ)べば、子(こ)

力 7 安 方 と 45 算 一 大

と  
う  
筋書きに作り替えたのではなかろうか  
（なが）  
（でんせき）  
（作りか）  
（か）

て下さるの伝説は既に序町初期に行なわれて、著者がその本曲に脚色したのであらう。

(4) 根柢は全く無く、下すいぶん強引な感があるが、  
善知鳥観世左近、一覗參照

光孝天皇と小野町との間に生まれた御

お知れなさい

源に至っては第九十五章へ近江更衣と相続され  
た。

うと  
うし  
のお父  
とう

か  
が  
だ  
な  
か  
が  
必  
死  
の  
手  
当  
て  
の  
甲  
斐  
も  
な  
く  
、  
源  
く  
安  
や

方はそくなつてまつたのだろう。

青森市安方町に善知鳥

八丁 真因版 809  
・ 810 亜善知鳥神社 亜善知鳥舞参

四

三

- ・カラー
- ・右側上半分に、  
はみ出で大きく  
掲載下さい。

13QG  
善知鳥神社発行の小冊子  
『境内探訪ガイドマップ』  
表紙参照。

12QG  
半字  
中納言 安方によつて開かれたと伝えられている。  
「安方の名を後世へ伝えたい」と願う人々が謡曲

- ・中納言 安方によつて開かれたと伝えられている。（\*安方は追贈されて中納言になつたのではなかろうか）
- ・「安方の名を後世へ伝えたい」と願う人々が謡曲『善知鳥』を作り、『善知鳥神社』を創建したのであろう。
- ・善知鳥神社には、宗像三女神（田心姫・湍津姫・市杵島姫）が祀られている。



写真図版 809 青森市 善知鳥神社

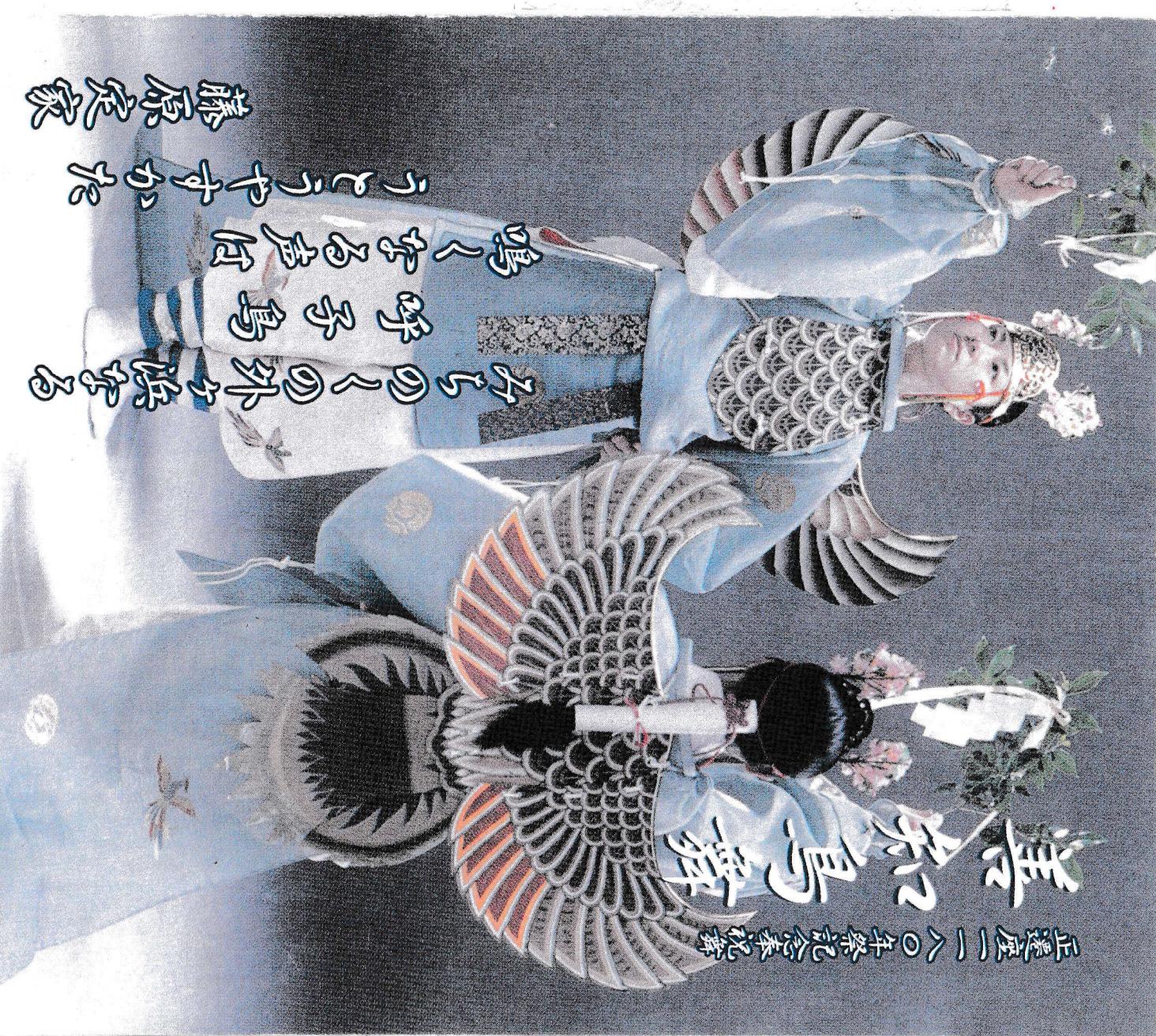
中納言 安方  
善知鳥  
善知鳥神社

～14枚のみ山～他は～

「地図でめぐる  
神社とお寺」  
武光誠  
角川書店 20頁  
地理真有

・左頁の右端の上、下段にわたりて縦長に大きく掲載下さい。

カット



当時の伊勢神宮大宮司 慶院俊様の特別な計らいにより  
神宮樂部によつて創作された舞である。

- ・藤原定家(1162~1241)は、安方が亡くなる時の様子を、伝え聞いていたのだろうか。
- ・伊勢神宮にも、詳しく伝えられていたのである。

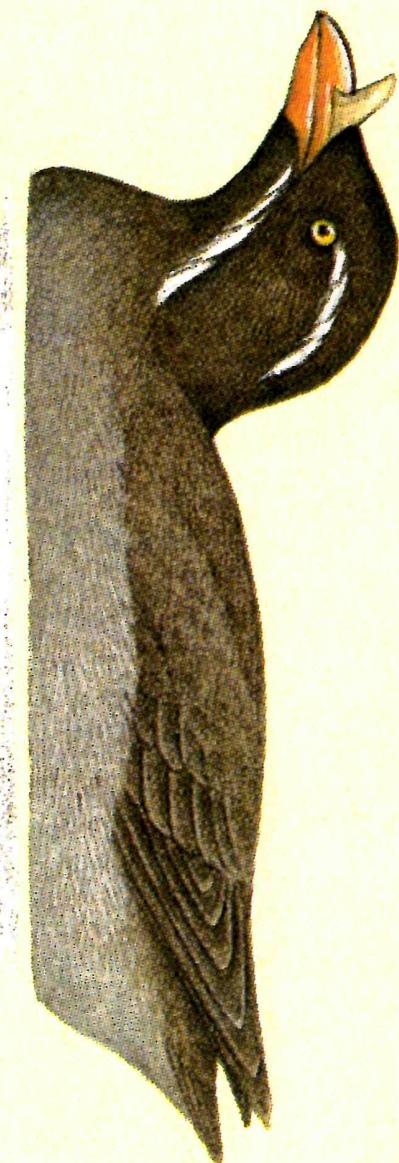
善知鳥神社発行の小冊子『境内探訪ガイドマップ』参照

はアキ

解説文小7-13。(因真因版) 8/17(火) へ善知鳥✓ 参照

知鳥  
✓  
參照

貞の右半分に掲載する



① 橙色のくちばしを持ち、体が黒っぽいすんぐりした大形の海鳥。北太平洋の沿岸地域で繁殖<sup>する</sup>。日本では北海道<sup>を</sup>夷島<sup>を</sup>、大黒島<sup>を</sup>、宮城県足島など北日本の数ヶ所の島で<sup>を</sup>繁殖<sup>する</sup>。多数繁殖<sup>している</sup>。冬期には南下する個体があり、全国の海上で少数が見られる。

生活 沿岸性の海鳥で、岸から数<sup>十</sup>位の海上で生活する。

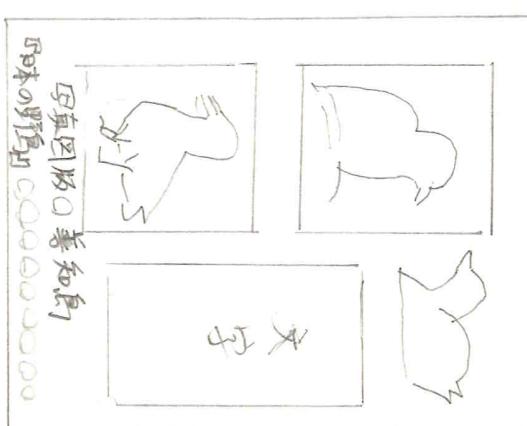
口<sup>くち</sup>みに潜水し、魚、イカなどを捕える。繁殖期には島でコロニーを作つて巣<sup>巣</sup>巢<sup>巣</sup>する。草地に巣穴を掘り、枯れ草など<sup>を</sup>敷いて1卵を産む。巣穴は直径15<sup>センチ</sup>位で<sup>て</sup>深さが2<sup>センチ</sup>に達する。抱卵個体以外は<sup>あ</sup>げ方に島を飛び立ち、昼間は海上で生活する。夕方になると島の近くの海面に集まり、暗くなるとともに次々に飛び立つてコロニーへ帰つてくる。着地や、地上を歩くことは上手ではない。育雛中の親鳥は、数匹の小魚を口いっぱいにくわえて戻つてくる。その魚をカモメ類に横取りされることもある。産卵期は4~6月、抱卵日数は30日位である。

声 集団繁殖地では、日暮れとともに沖合から帰つてくるこの鳥の羽音がすさまじい。しかし、鳴き声を出すことはほとんどなく、地上で「ググツ、ググツ」と低い声を出す程度である。繁殖期以外に鳴き声を聞くことは、まづない<sup>はず</sup>である。

見分け方 くちばしは橙色で、夏羽ではつけ根に突起<sup>がある</sup>。

ある。腹部が淡色である以外は全体が黒褐色で、夏羽では顔に2筋の白い飾り羽が出る。

貞内に、以下のような  
配置で掲載<sup>したい</sup>。



皮の左上に配する

5,589<sup>P</sup>

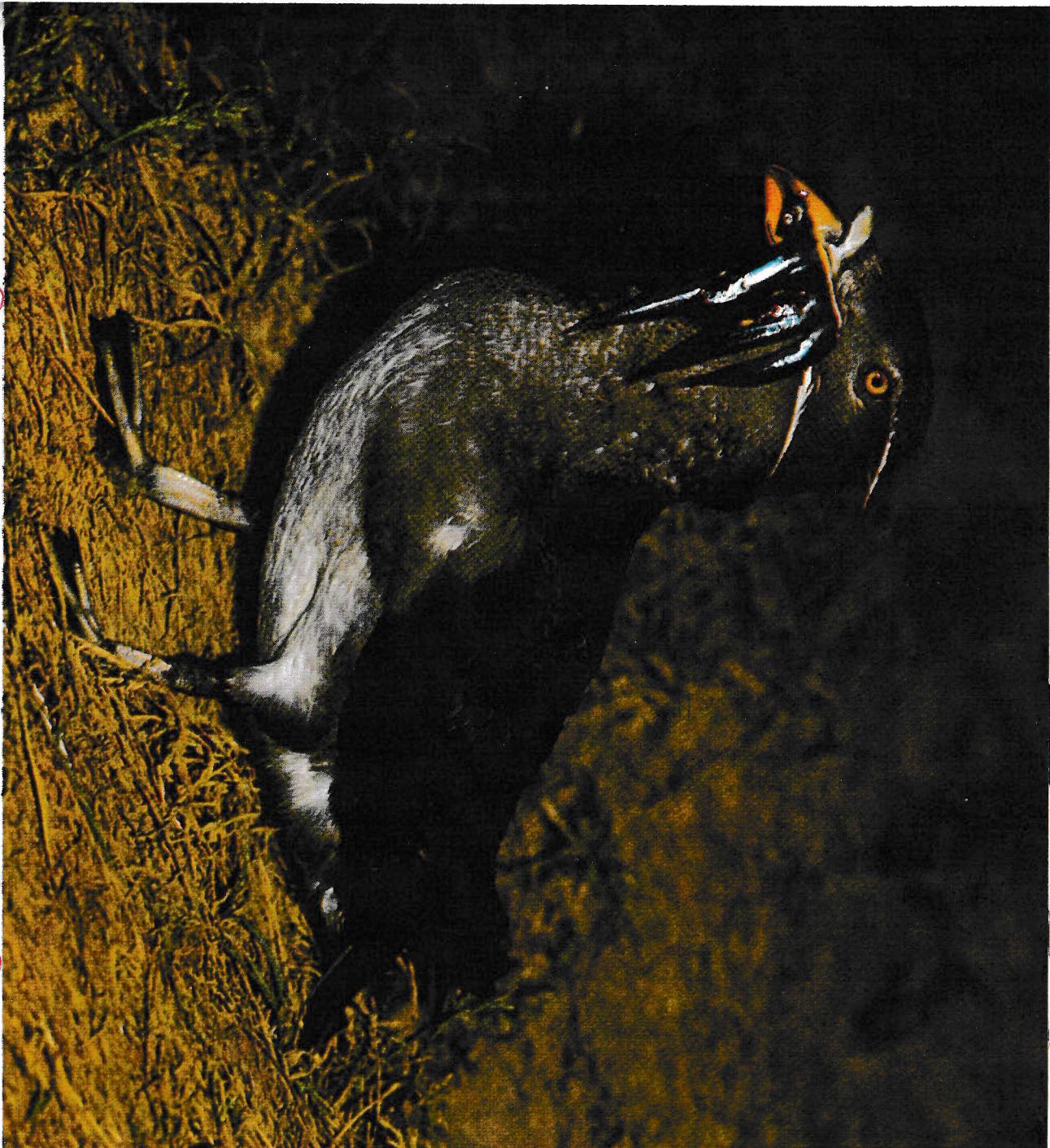


成鳥

夏羽 4月中旬 山形県庄内浜 くちばし基部の突起と白い飾り羽は冬羽ではなくなる。

貝の庄 下二瀬

5,590 P



(第13巻) 246 - 1/5

成鳥

夏羽

7月上旬

北海道天売島

夜になると餌の魚をいっぱいわえて、土中の巣穴へ戻る。

てうり

えき

どちゅう

すあな

もど

利尻島の南約50km

下絵の奥間の年児名  
万巻1~20頃(了山部族)  
巻末3~43~433

棟方功の「善知鳥社通」4頁上  
善知鳥社通小

ホストルカット62°

1985 1993  
5/16 4/4 1944 1897  
60 44 96

増田手古奈の句碑  
善知鳥神社の境内には「増田手古奈」  
の句碑がある。昭和六〇年(一九八五年)に設置。  
一九九三年(平成五)の句碑が  
石碑には、  
みちのくの善知鳥の宮の小町草  
と刻まれている。  
青森県南津軽郡大鰐町出身の増田手古奈は、  
東京帝大医学部卒業後、家業の増田医院  
を継ぐ。一方で、俳人高浜虚子(一八七四)  
一九五九)の指導を受け、俳諺(十和田也  
主導し、県俳壇の発展に貢献した  
といふ。(善知鳥神社の冊子参照)  
善知鳥神社に参詣した増田手古奈は、神城  
内(で)下(美)上(花)を咲かせて、(小町草)と  
月に一左のであろう。  
その時の「大きなかき」と、「予期せぬ感動」とある歌  
たのではなかろうか。

1985  
1897  
88

おやらく、増田手古奈は、善知鳥神社と  
小野小町とのあいだに、深い闇黙性があるこ  
とを、かなく精一く知つていたのだろう。

この句碑は、昭和六十一年（一九八五年）  
に建立されたというのだから、増田手古  
奈が生存してゐる時の設置だといふことな  
る。

増田手古奈が作つた多數の俳句のなかでも  
この句こそ、手古奈自身が最も大切に思つ  
ていたに違ひない。

また、増田手古奈以外にも、青森市およひ  
市近郷には、詳細を知悉していゝ者があら  
れるのではないかろうか。

なあ、

「善知鳥神社の境内にこの句碑が設置され

てゐる

ところとから推し量ると

社山の神職者も、感慨深い恩りを抱いたのだ

う、と察せられ

\*

増田千秋句碑写真 三輪神社用子裏面

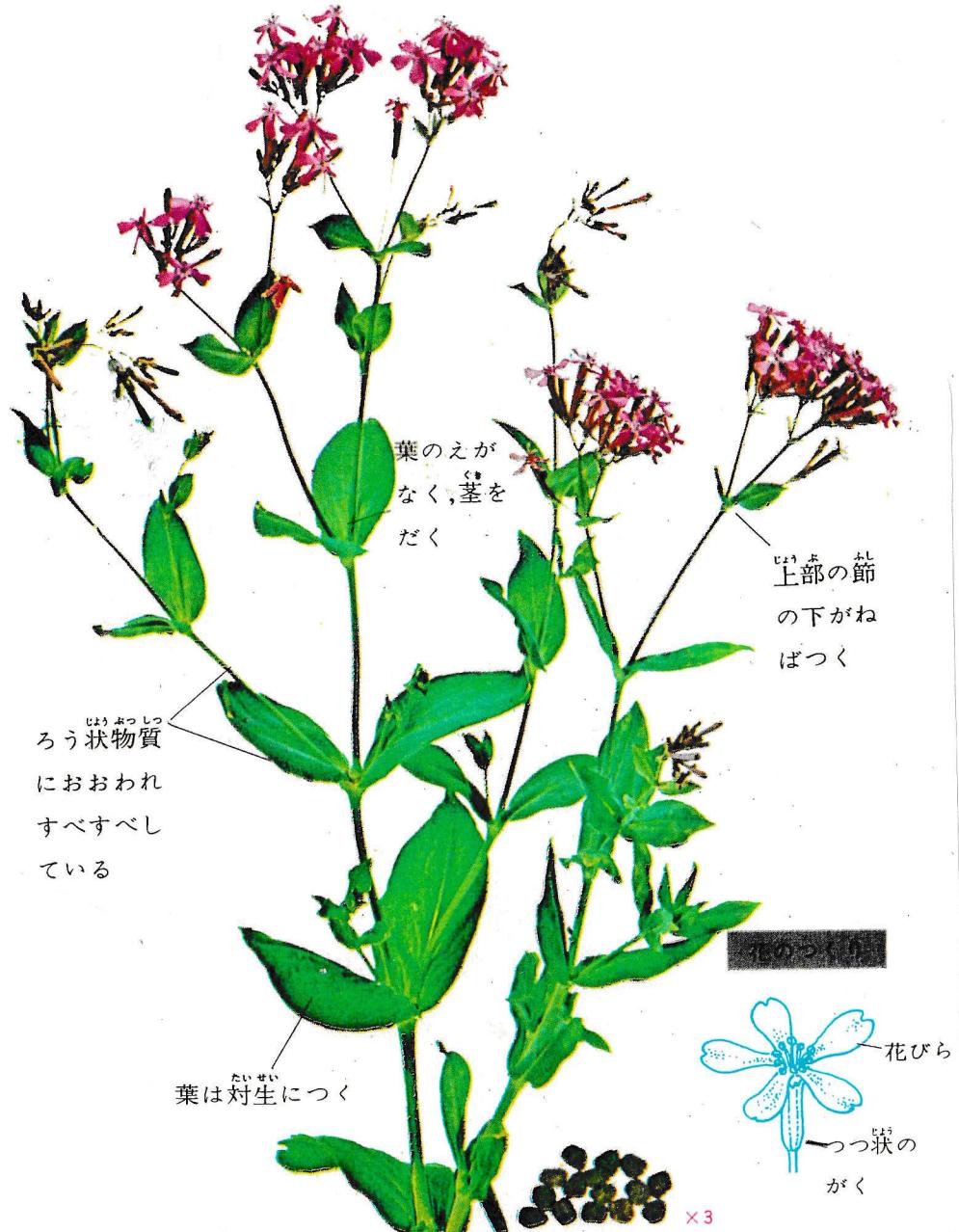
頂に紅紫色か白色の小花を密生。茎の節の下  
部に粘液を分泌し、小虫等付着せると食  
虫植物ではな。性質が丈夫で、雜草として  
はえている。

と、ハラ。〔「広辞苑」原色学習ノイド図  
鑑レ8花・作物、学研、34刷、15頁、192頁參  
照。〕

實に美しい。

四小町草の花が群れをなして咲いてゐるのを見て、

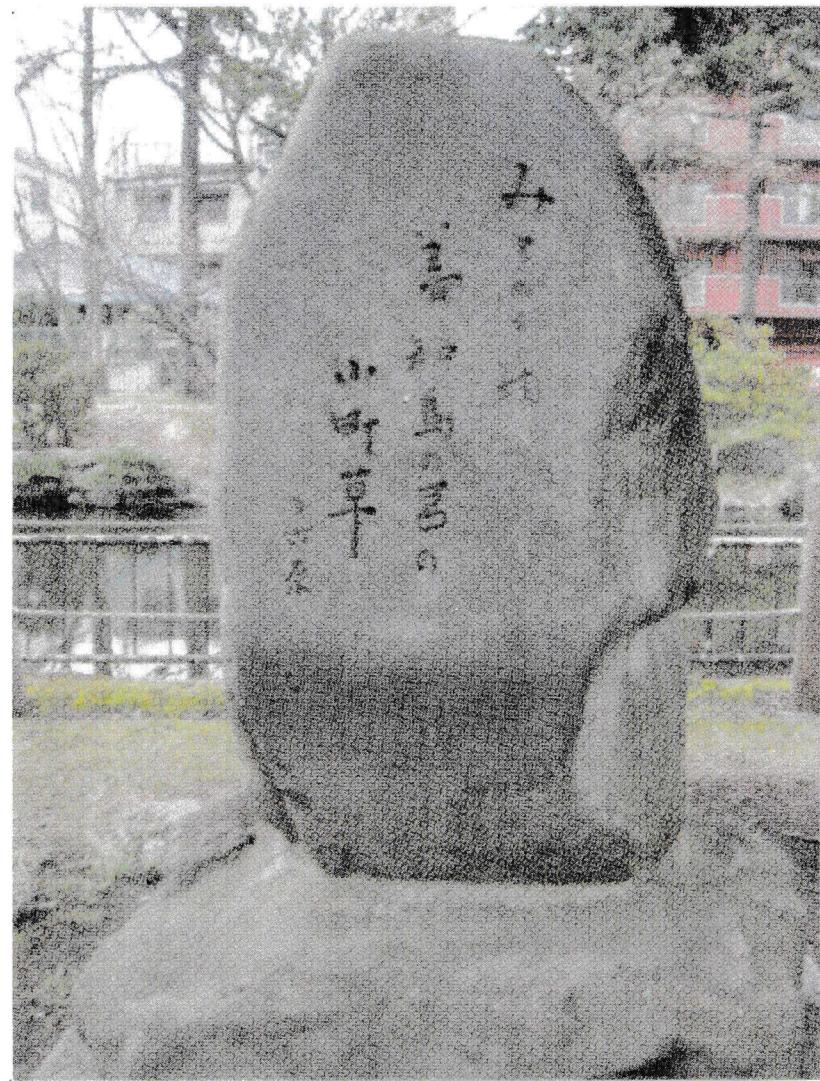
|  |                            |   |  |  |
|--|----------------------------|---|--|--|
| 五<br>〇<br>七<br>三<br>葉<br>は<br>耶<br>形<br>で<br>白<br>粉<br>を<br>帶<br>び<br>る<br>。 | 科<br>の<br>越<br>年<br>草<br>。 | 南<br>ヨ<br>ー<br>ロ<br>ッ<br>ハ<br>原<br>産<br>。 | 町<br>草<br>（<br>別<br>名<br>）<br>虫<br>取<br>撫<br>子<br>（<br>は<br>ナ<br>テ<br>シ<br>） | 因<br>外<br>の<br>い<br>く<br>ぼ<br>く<br>と<br>（<br>か<br>ー<br>う<br>な<br>で<br>こ<br>） |
|--|----------------------------|---|--|--|



## 小町草

〔原色學習ワク“因鑑」8花：作物、学研、15頁参照  
361

ますだてこな  
増田手古奈句碑  
昭和60年



碑文「みちのくの 善知鳥の宮の 小町草」  
第13巻) 246-5/5

火<sup>ひ</sup>、熱<sup>あつ</sup>い灰<sup>ほ</sup>などをいう。〔古今和歌集〕日本古典文学全集、  
な、お、「お<sup>お</sup>」は、「お<sup>お</sup>き火<sup>ひ</sup>」ともい、赤<sup>あか</sup>くおこった炭<sup>すこ</sup>。

井の呪いの魔術師

群書類從本『小町集』に、いづれ記されてゐる。

別題を惜念する所である。歌詞は「おまかせ」。所持する歌詞は「おまかせ」。

陸奥国の小野朝臣は、小町がこの国を去ることにする時、

\*

「すみません、お手数ですが、お車でいらっしゃるのですか？」

「それほどの事えです。都にいる小野朝臣への手紙を持ちておどろかせるがよし。都でひの子を咲かと立派に育てておれらがよし。近江國の小野の里

の里を訪ね上り、と田原た。小町は早速に、陸奥国に赴任してきていた小野朝臣の邸宅へと足を運び、相談した。

ねたように、小町も、孫娘を連れて、近江国的小野

(第13卷)

かつて、母衣通姫めどりひめが小町を連れて近江国的小野の里を訪ねた

「行かなければならぬじのむ」— 素も早く、小野の里へ連れで育ててはいけないのむ

この子は女の方なのだから、命をねらわれるといふことはない

そんなある日、小町は一人、しゃべりたい。

もはや、たのみとする者は誰もいなくなってしまった。  
涙を嚙みて臥して慄側へ、腸を断ちて起きて喧嘩ぶ日々

忘れ形見であるその子は、すでに輝くばかりに美しく、  
しかも利発<sup>きわ</sup>めりもなかつた。先<sup>き</sup>が樂しみな子であつた。  
しかも利<sup>きわ</sup>めりもなかつた。夫<sup>お</sup>大江惟草<sup>ゆきくさ</sup>が病に倒れ、そして亡へなつ  
し然るに今度は、夫<sup>お</sup>大江惟草<sup>ゆきくさ</sup>が病に倒れ、そして亡へなつた。

小町と、息子の嫁とは、幼い可愛い盛りの女子が残された。

(卷下) 釋名

といふ。(小野小町追跡)片桐洋一、立間書院、二三頁参照)

「奥州八十島、奥州玉造の小野など、今ではどこかわからぬが、とにかく陸奥を舞台にしている」

247

羽前國最上郡、南は羽前國東田川・西田川一郡、西は日本海  
羽後國九郡の一つである「飽海郡」(北は由利郡、東は

また、因みに述べると、

この物語では採用しない。

と不審に思われる。

を後にして、誰と別れ、誰と向かつたのだろうか。  
小町は、おののる(島の)および郡島(といひ名島)  
そうかも知れないが、それでは、  
お此の井て……「の歌を作ったのだろうか。  
とすれば、小野小町は、陸前(松島・塩釜湾あたりで  
いふ。)小野小町歌(小林茂美、桜楓社、一八一頁参照)

な歌枕として定着していった。)能因歌枕(八雲御抄)  
陸奥の五ヶ国。今福島・宮城・岩手・青森の四県(有名な  
因縁がふかく、奥州(白河関以北の磐城・岩代・陸前・陸中  
あり、「浮島」も含めた「八十島」の名でも小町説話とは  
よれば、陸前(宮城县)の松島・塩釜湾に所在する島名で  
「大日本地名辞書」(吉田東伍著。一九〇〇年刊)に  
次のように説示されている。

さて、さて、ついに「島いやみ」・「みのまお」の歌のい  
頁参照)

ある。〔古今和歌集〕日本古典文学全集、小学館、四〇八

都島辺の別れなりけり

おきのて身を焼くよりかは

小野小町

おきのみやしま

■おとと、『古今集』墨滅(すみぢる)

\*

られていたのだろう、と想察される。

名を聞いただけでの島のいとか理解できぬべく知

・そしてもやもやとする、「せじのてる」は、その

誰かが、小町に歌を詠む(かに歌めたり)と解かれる。

・また、「あてのしせじ」とあると題を「あてのしせじ」とあると題だ

島のいとのよつに思われる。

沖(おき)のて「の意であつて、沖に浮かぶ」あてのいの名

・さりながら、——おきのて「と歌つてゐるのだから、

・なるほど、「あてのしせじ」がどいを指してゐるのかは

の別れです

この陸奥國から、宮様の子とあひひへひき名(おみ)都島へ

して、身を焼くより悲しいことは、息子らが眠つていて

焼いて葬(は)った時の様子がせせせせ思ひ起つたれます。そ

いのでしょう。」(お)熱(こ)い灰(ご)といえ、息子の遺体を

沖(おき)に浮かんでいるので島を見る機会は、もう決して無

島く参考(554) 5.5.93 P

平安時代前期のこの当時、「ゐての島」または「ゐの島」と呼ばれていたのである。下北郡(半島)と奥国東北部に半島(長い柄のついたしゃく状に突出)する下北半島(半島ともいふ)の最北端部の山塊が、しかし、仮りにこの物語では、「あたのか」とは、今と比べては、全く知るすべがない。「ゐての島」もしくは「おきのゐ」という名の島がどこにあったのか。

\*

呼ぶに相応しいといろなのかどうか、詳しへは分からぬ。とはいえ、この「井手」が、「ゐての島」沖のゐて」と「井手」という地名があつた。つまり、羽後国南端部(現在の山形県北端部)あたりに「和名抄」(出羽国飽海郡)参照)といふ郡といへり。云々

由利郡の南半に亘り。近世私に割て、南を遊佐郡、北を遊佐・雄波・日理(理由)・餘戸の九郷を載す。蓋し今の大和名抄安久三と註し、大原・飽海・屋代・秋田・井手・

554 5.5.93 P

むつ市あたりが平地になつていてるので、陸奥湾の南岸から北方を望むと、下北半島最北端部の山塊は海上に浮かんでいるよつに見える。つまり、「島」のよつな趣を呈して尚、後代(554)は室町時代の永禄の頃、糠部郡の北を割き「海上郡」とし、次いでこれを「北郡」に改めたといふ。(帝國地名辞典)太田爲三郎、名著出版下北郡く参考)

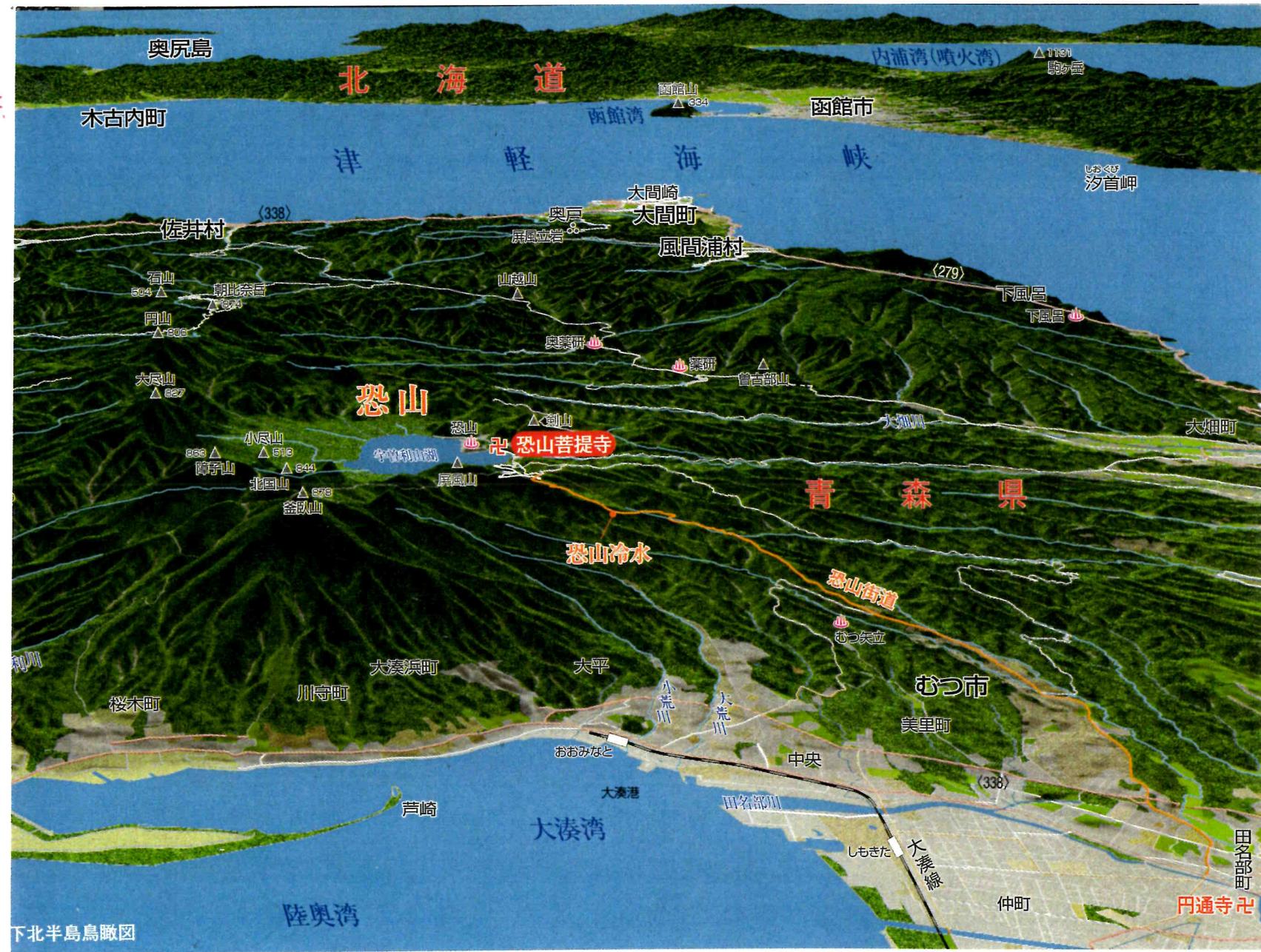
海上に浮かんで見える下北半島最北端部の山塊の中央には、「恐山」があり、死靈の意中を述べる(と)の出来事は、「恐山」が、(と)称される巫女たちの奇習が「いた」(市子・神巫)とされる巫女たちの奇習が有名である。(広辞苑)恐山・いた・市子・神巫く参考)

●恐山の「恐」という字の類語(類似の意義をもつ語)に「畏」という字がある。

そして、この「畏」「畏」という字は、「ゐ」と發音する。(大字典)上田万年、講談社畏く畏く参考)

の島、「もへは」ての島」と呼んだとしても、不自然ではなきそつと思われる。

・また、「ゐて」「と」とは、かなり似ていて、



13回

14回 第554回

おもれさんちょうかんすい  
恐山鳥瞰図「地図でめぐる神社とお寺」武光誠  
帝国書院 平成24年7月12日発行。23頁参照 250<sup>P</sup>

カツト↑

5,595P

カツト↑

カツト↑

・カラー

・右頁の下半分に  
大きく掲載下さい。



1404  
→

地獄

写真図版 812

あらわせ

忍山の

地獄

・硫黄の臭いが立ち込める荒々しい岩場。風車がカラカラと乾いた音を  
たてる荒涼とした風景が広がる。

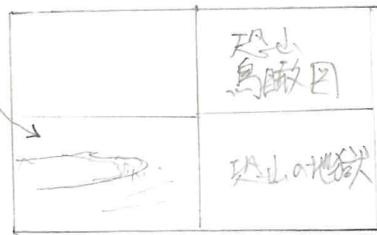
1326

『地図でめぐる神社とお寺』武光誠、帝国書院、平成24年7月12日発行、双頁参照。

カット←

5,596P

・カテー  
左頃の下部分に  
大きく載せて  
下さい。



↓カット

↓カット

極楽浜 HL 14Q9 宇真図版 8/13 おまかこへ うそりやま うそりやま じくらくはま  
宇曾利山湖 (極楽浜)

12Q9 宇曾利山湖は、強酸性のカルデラ湖。白砂の浜辺に点在する死者供養  
の石仏や積み石が独特の光景を見せる。

13Q9

『地図でめぐる神社とお寺』 武光誠 帝国書院 平成24年7月12日発行 22頁参照  
252

（八六一）恐山靈場の本殿である地藏堂は、清和天皇の貞觀四年（七九四～八六四）によつて建立され、慈覺大師（七九四～八六四）によつて建立されたといふ。〔青森県の歴史〕宮崎道生、山川出版社、四七～四八

智證大師(第13卷226頁)(第13卷)253

■ 「ゐての島」を題として歌を詠むよつに勧められ、  
「お、きのゐて。」といふ発句が心に浮かんだ途端、  
小町は、死んでしまつた息子を思い出したのだろう。  
「あなたを陸奥国に残して行くのは、身を焼くよりも悲しく  
悲しいといつゝ言葉の奥の、切り焼くよつな苦悶が伝わ  
てくれる歌である。

■ 一方、「都しま」は、「都」とのことであつて、「平京都」  
を指しているのだらうと思われる。

「島」は、国または一地方の意であり、万巻二二五の  
柿本人麿の歌、  
天離る夷の長道ゆゑひ来れば  
明石の門より大和島見ゆ

八貢參照

例えば、「手といふ字は、て「とある」た」「て」といふ字である。

集「三七番歌」みちのくの玉造り江にてぐね舟のほにそいで  
ような形をして入り江「陸奥湾」。(群書類從本「小  
玉造り江」は、ちよつといびつな、造りかけの勾玉  
「ゐての島」(ゐの島)は、「下北半島最北端部の山塊」  
■もししかしたら、平安朝当時、  
風習があつてよく知られています。  
(以下第55回図  
参考)

尚、八甲田山の山頂から、北の方角眼鏡でもなんへ群らかでない。

このことを指していたのはなかなかうかと思われるが、

「夏泊崎」の西岸沿いに点在している小さな島々、

- 『八十島』は、陸奥湾南岸から北へ向かって突出す
- 『玉造の小野』は、『陸奥湾近傍の小野』。

うまでもなべ群らかでない  
\* 尚、八甲田山(八四四)の山頂から、北の方角眼鏡はうがくがん

の(区役組)指していたのであるから、かくて説かれながら、

「夏泊崎」の西岸沿いに点在している小さな島々、

『玉造の小野』は、「陸奥湾近傍の小野」。

君を添へかじく 参照)

集「三七番歌」みかのへの玉造り江にいく舟のはにこそ出で  
よかた刑をしてしまふノ江一國學館」、語類行ス一ノ

- 『玉造り江』は、ちよつといひつな、造りかけの勾玉

● 「あての島」(みの島)は、「下北半島最北端部の山塊い

■もしかしたら、平安朝当時、風習があつてよく知られている。

「(八) たま」、「(八) たま」、「たま」の「たま」「(八) たま」

(手てがみ・手たお折る等)

「おきのるて身を焼くよりあかなしきは  
おきのるみやいしま  
一〇四には、いつ記されている。  
先に迷<sup>めぐ</sup>れたりたつに、『古今集』墨滅歌、卷第十、物名部、ある。  
違<sup>た</sup>た意味に解釈<sup>いか</sup>れることとなつてしまつたよ<sup>う</sup>で  
ところが、この「別れを悲しむ歌」は、後代になつて、  
小町の歌を聞いた者たちも、皆、涙<sup>なみだ</sup>してやつてやつて下みだ  
たの娘の無事を見守<sup>も</sup>つていてやつてやつて下みだ  
りさえ出来ないでしょ<sup>う</sup>が、どうかこの陸奥國<sup>くに</sup>から、あ  
も、おそれへらへる<sup>ま</sup>が、お墓<sup>おは</sup>参<sup>まい</sup>つて、お水<sup>みず</sup>すくつて、お水<sup>みず</sup>すくつて下みだ  
たは帝の皇子<sup>むすめ</sup>なのです、きっと分か<sup>わ</sup>かって下みだ  
悲<sup>かな</sup>しいけれども、都<sup>みや</sup>へ行かなければならぬ<sup>う</sup>。あ  
と歌つたように理解<sup>わか</sup>される。  
都<sup>みや</sup>への別れ<sup>べつれ</sup>けり  
おきの井<sup>いの</sup>みをやへよりあかなしきは  
しま  
いといと言<sup>い</sup>われた時、「るて」「と」「せ」「ま」との「」に切り離<sup>はな</sup>は  
つまり小町は、「ゐてのしま」といひ題で歌を詠んでほ  
貞<sup>めい</sup>や<sup>めい</sup>じしま<sup>じしま</sup>参<sup>照</sup>(  
四〇八頁)  
だつたのです(『古今和歌集』日本古典文学全集、小學館、  
真<sup>ま</sup>つ赤に燃える情<sup>き</sup>ねうて身が焼<sup>や</sup>かれる思いをするよ  
都<sup>みや</sup>島<sup>しま</sup>辺<sup>へ</sup>の別れ<sup>べつれ</sup>けりけりけり  
都<sup>みや</sup>もと悲<sup>かな</sup>いのは、都<sup>みや</sup>と遠<sup>とお</sup>い島<sup>しま</sup>とに引き離<sup>はな</sup>はれ  
りありもと悲<sup>かな</sup>いのは、都<sup>みや</sup>と遠<sup>とお</sup>い島<sup>しま</sup>とに引き離<sup>はな</sup>はれ  
る<sup>る</sup>。陸奥國<sup>くに</sup>にて、お<sup>ま</sup>こと女<sup>め</sup>すみけり。お<sup>ま</sup>こと女<sup>め</sup>すみけり。  
れ<sup>る</sup>。陸奥國<sup>くに</sup>にて、お<sup>ま</sup>こと女<sup>め</sup>すみけり。お<sup>ま</sup>こと女<sup>め</sup>すみけり。  
なむけをだにせむとて、都<sup>みや</sup>といふ所<sup>ところ</sup>にて、  
「宮<sup>みや</sup>いへい」「んない」といひ。かういの女<sup>め</sup>いとかなして、馬<sup>ま</sup>のは  
むかし、陸奥國<sup>くに</sup>にて、お<sup>ま</sup>こと女<sup>め</sup>すみけり。お<sup>ま</sup>こと女<sup>め</sup>すみけり。  
なむけをだにせむとて、都<sup>みや</sup>といふ所<sup>ところ</sup>にて、  
「おきのるて身をやへよりあかなしきは  
おきのるみやいしま  
片桐洋一、笠間書院、二二二三頁参照)

「竹取物語・伊勢物語・大和物語」日本古典文学大系、岩波書  
店、八一八九頁参照)

5.5.9.8

小野小町

おきのるて身を焼くよりあかなしきは  
おきのるみやいしま

一〇四には、いつ記されている。

先に迷<sup>めぐ</sup>れたりたつに、『古今集』墨滅歌、卷第十、物名部、ある。

ところが、この「別れを悲しむ歌」は、後代になつて、

\*

小町の歌を聞いた者たちも、皆、涙<sup>なみだ</sup>してやつて下みだ

りさえ出来ないでしょ<sup>う</sup>が、どうかこの陸奥國<sup>くに</sup>から、あ

も、おそへらへる<sup>ま</sup>が、お墓<sup>おは</sup>参<sup>まい</sup>つて、お水<sup>みず</sup>すくつて、お水<sup>みず</sup>すくつて下みだ  
わね。

悲<sup>かな</sup>しいけれども、都<sup>みや</sup>へ行かなければならぬ<sup>う</sup>。あ

と歌つたように理解<sup>わか</sup>される。

都<sup>みや</sup>への別れ<sup>べつれ</sup>けり

おきの井<sup>いの</sup>みをやへよりあかなしきは

し

いといと言<sup>い</sup>われた時、「るて」「と」「せ」「ま」との「」に切り離<sup>はな</sup>は  
つまり小町は、「ゐてのしま」といひ題で歌を詠んでほ

貞<sup>めい</sup>や<sup>めい</sup>じしま<sup>じしま</sup>参<sup>照</sup>(

「小町がつまひの歌見えたれども、系図に載せず。」  
は、『小野小町考』の中で、  
・なお、本居宣長(江戸後期の国学者、一七九一~一八五五)  
小町の孫として記されている。  
すばわち、自身の名は伏せられており、有名歌人である  
に見られ、——「ほちがむせじ」とある。  
小町の孫のことは、『後撰和歌集』巻第十八一一六十九  
がつたよつである。

「小野小町、大江国惟草が妻になり下りけるが、おほえにこれいはゆる後尼にならふるべくおおみのへにせきであら」といふ言ひわれていて、この事はおおむに「伊勢物語」の事である。この事はおおむに「伊勢物語」の事である。

陸奥國むつくにを後あとにした小町おとこまちらは、先まへず、都との小野朝臣おとこのわあさとの邸宅てきたくを訪たずねた。このではなかうか。かくおとこまちは、一身いっしんに愛あいを受けうけていた小町おとこまちのおかかつて、光孝天皇こうこうてんのうの寵愛こうあいを一身いっしんに愛あいを受けうけていた。そうして小町おとこまちの誉ほが忘れられるはずはなかつた。都との小野朝臣おとこのわあさとは、れいを尽つくして小町おとこまちを迎むかえ、喜んで孫こ娘むすめを引き取ひきとつた。これである。だが、小町おとこまちの孫こ娘むすめに厳きびしく 礼儀れいぎ作法さくほうや学問がくもんなどを習得しゅとくさせることで、愛情あいじょうを注そそいで育いくてきた幼おさなくあどけない子こを手放はなした。かなかつた。町まちらは、気抜けきぬけしたよつにまよひ歩あるき、……やがて、近ちかい野のの里さとで大事だいじにされたに相異あらわない。お、小町おとこまちの孫こ娘むすめの母め (つまり光孝天皇こうこうてんのうの孫こ娘むすめの母め) は、小野の里さとで大事だいじにされたに相異あらわない。しかし小町おとこまちは、尼あまになつて、近江國関寺おきなむらくにせき (大津市関寺町おおつしにせきまち) の長安寺ながやすての別称べいせきで、もと三井寺みついの一坊いはうあたりに住すんだ、と解わかれる。(「広辭苑」ひろじゑん関寺くにせきく参考くわんしやく照てらし) 『伊勢物語いせものがたり』伊勢ものがたり『愚見抄ぐいんしやう』ぐいんしやうおよび『鴻臚館記こうろくかんき』こうろくかんきには

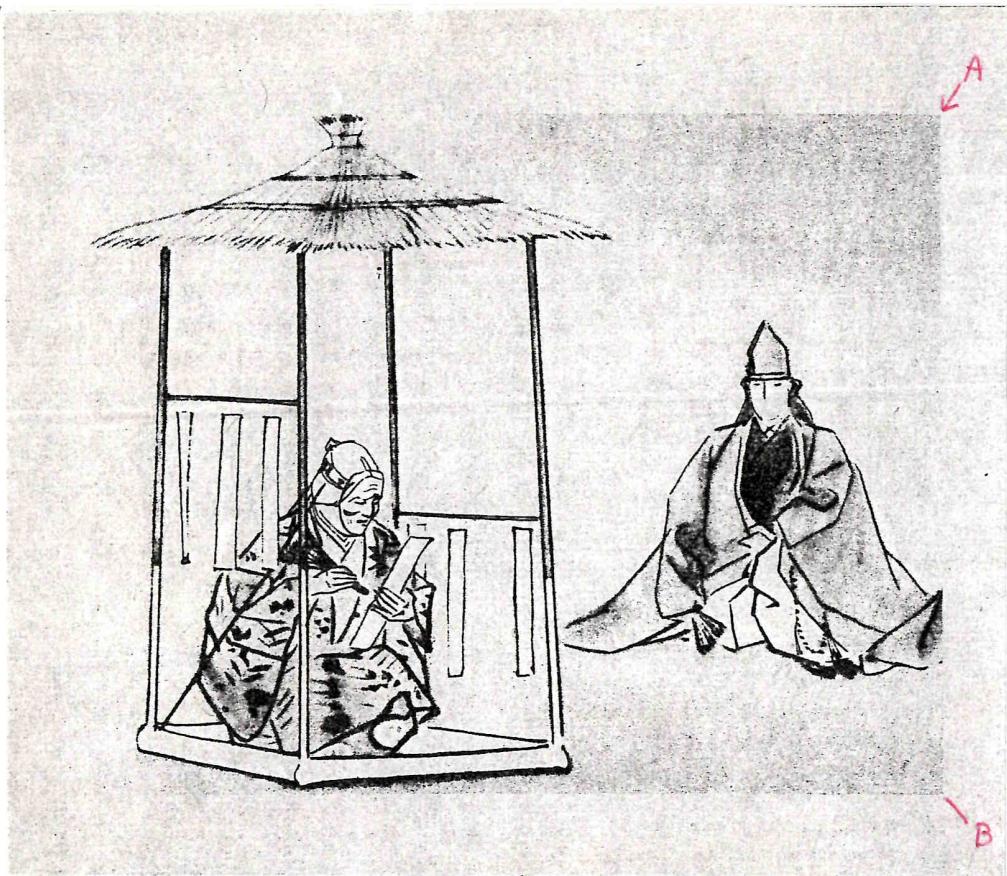
XHV 017-254  
ごらんじまして H25.12.14 ④ 大型「」助詞  
千葉県立美術館 ばとしの結合「」  
同文由5569~5570番迄。

とある(物語) 鶴賀(アサヒ)

たも 星祭 うたげ 酒宴 さかや  
(星に乘る) 実 えん 歌舞など17集(120)  
肉身取 5,601P 肉身取 103' 1425.12.3 ④

・貞の上半分に、限度一杯大主<sup>左右に</sup>火<sup>火持たせ</sup>て配置ください。

5,602 P.



第555図 [能]『関寺小町』の一場面

『関寺小町』 観世左近 檜書店 昭和62年8月25日発行 2~3頁参照

著作権  
諸君を  
もつておけ  
下さい。

- お願い。 \*左端は、庵の中には、小野小町の様子を示す。
- ・ AとA'、BとB'を突き合わせて、一枚の写真にして下さい。
  - ・ 突き合わせた縦線か、分かりやすく お願ひします。

大炮 大カニカ 576<sup>0</sup> 穴 穴 大カニカ 1644<sup>0</sup>  
日本製(日本製) 爪 爪 セセニ<sup>0</sup> 紗 紗 漢<sup>0</sup>  
大炮 大カニカ 555<sup>0</sup> 穴 穴 漢<sup>0</sup>  
金絲 金絲 紗 紗 漢<sup>0</sup>  
大炮 大カニカ 555<sup>0</sup> 穴 穴 漢<sup>0</sup>  
金絲 金絲 紗 紗 漢<sup>0</sup>

庚辛·13页右5行

5,603

左近 檜書店 昭和六十二年八月二十五日完

行參照

小野小町  
2747  
1234

294页下  
123行 乙  
平行四边形

平行平行

5,604

君臣 (きみち) 君主  
枕草子 1667 君主 P  
二の宮 (二ノ宮) 1671 下  
君主 (くわう) 朱44 黑岩浪香 1557  
君主 (くわう) 11月集 31 番歌  
黒岩浪香 (くろいわ らうこう) 君主 (くわう)

片桐洋一 小野小町道跡 68 公里にある

についで、都人等へ詠つたのだろう。  
す 小野小助か、関寺あたりに庵を結んで息す。  
と う 喋き聞いた者虚か、都から引つ切り無す。  
に やつて来るようになつた。  
ある時、君たち（公達の）とどうか（かへう）  
た 川野川町追跡、片桐羊一下笠間書院、六八貞へ公達  
新選漢和辞典 小林信明 小学館 昭和四十二年発行  
落ちた。まわれたので、いつぬ  
小野小町の目から、涙かとめどなく零れ  
「どう、心無いと思ひ遣りを欠く」  
な言葉を口にするのだろうか  
「う記されたり」とは、すつかり二度  
わすれや、いぬるとある君たちのと給へ  
みうのくの玉つくり江に、こぐ舟の  
ほにこそ出ぬ君を説へれど  
第一、二、三句が、四句の「ほ」は「  
（舟の帆）および」秀（ほ）  
（群書類從本 小町集）

5,605<sup>P</sup> ~~5,605~~

夏瓜生「小葉小瓜」274°  
八月生「小葉小瓜」269°上

大蔵  $\frac{2}{3} \times 100 = 66.6$

古今 353 頁 い かのたくはく  
石川啄木 3 行詩  
~~3 行書を 12 丁 下り~~ 作, 大

5,606 P 小野小町 再版  
181頁 1911年

トヨヒトモ 再版 81頁 トヨヒトモ 1927 花の色はうつりたけり

古今 353<sup>丁</sup>  
小冊集 519<sup>丁</sup>

古今集 354<sup>1</sup>

—X

5,607

大便「あんとう」

大垣 何ら どう, どうら 古今集 354<sup>P</sup>上

木友のでしょ  
う

